足らん夜

血ったらたらり
泪ったらたらり

月ばっか居て誰も居ない街道ですっ転ぶ
夜め俺の足つっかけて逃げやがった

懺悔も聞かんとよ神様よ
悪魔は花火を打ち上げ夜って

手元の八百度の情熱が写真を焦ぐ
目元の八千度の情熱が心を焦ぐ

焦がれた情熱が眼に染みたか

泪染み込むコンクリートを覚えたまま
カーテンで泪拭く

白テーブルに血の焦げ痕見りゃ
今日も生きちまったな俺様な

恋の詩を辞書の　死　の頁に挟み
死の詩を辞書の　昨日　の頁に挟む

柔軟な布団様はあの娘より堅え
あの娘より堅え俺様の頭様は何様のつもりだ

寂し様は夜に裸に成り
真っ黒闇をいいことにして人生に成済ます

……千葉大輔

酔えば心畜生に酔い
酔えば体畜生に酔う

嗚呼々！　嗚呼々っ！

血ったら泪ったら足らんのだ
血ったら泪ったら足らんのだ
血ったら泪ったら足らんのだ
血ったら泪ったら足らんのだ

僕のお嫁さん

砂場で兵士は戦う
君を守るために穴を掘る
なくなってしまうまでやめられない

どんぐり百個で君の愛を買いにゆく
はい！　これ百万円！

　ずっと僕のそばにいて

タンポポの結婚指輪
萎れない約束
ミツバチが見つめてる夏

泥水で乾杯！
注ぎすぎて溢れちゃう
もったいないもったいないよ

　ずっと僕のそばにいて

滑り台からここにおいで
トカゲをあげる
切れても死なないんだよ
たくさん持ってるんだよ

　ずっと僕のそばにいて
　お嫁さんごっこをやめないで

　ずっと僕のそばにいて
　お嫁さんごっこはやめないで

宵の詩

宵の音楽隊は
月を照明に詠いだす
迷い人の足音を刻みながら影を踏む

宵の神はキャンディーで喜ぶ
甘く切ない人生を転がしながら
とても小さな音に耳を澄ます
人型の涙を聴くために

月の灯りで本を読む
あの娘に手紙を書くために
今宵、ベンチは宵の足
しっかりと泥を踏みしめている

宵の音楽隊は歩き続ける
月を浴びせた手紙を僕に届けるまで
朝の太陽に向かい
詠うことをやめないだろう